

## 慶長十五年間書 貞享三年書写 五逆秋(無門関鈔)の 国語学的研究(一) : 序 指定辞の様式

春日, 和男

<https://doi.org/10.15017/2332819>

---

出版情報 : 文學研究. 61, pp.79-88, 1963-03-20. 九州大学文学部  
バージョン :  
権利関係 :

慶長十五年聞書

貞享 三年書写

## 五逆秋（無門関鈔）の国語学的研究 (一)

—— 序 指 定 辞 の 様 式 ——

春 日 和 男

はじめにおことわりをしておかねばならない。標題のごとき一つの国語資料、それも未公開のものについて論を進めようとするには、まづ精緻な解題と、本文の掲載（写真印影、または活字繡刻）を行ふのが順序であるが、これは資料の量的問題と、本誌の性質上、やや無理を伴ふため、やむを得ず後廻しにすることを諒承願ひたい。したがって、ここでは当面する極めて一般的な解題と、本資料についての概略、ならびに国語学上の価値に關して考へるとどめ、抄物全般の、あるいは他の無門関抄との比較およびその方面における解説は、本文復刻の機会を待つて行ふことにする。

1

禅宗無門関は、その序の表文に明らかな通り、南宋の紹定二年（一二二九）正月五日、理宗の天基聖節に際し、その寿を祝禱し、献呈するため、報恩祐慈禅寺の無門慧開が、綽州狗子、百丈

野狐以下乾峯一路に至る祖師の機縁四十八則を挙げてこれを評抄し、門人宗紹をして紹定元年に編次させたもので、無門関の名は、本書に「頌曰大道無門千差有路、透得此関乾坤独歩」とあるによることは周知の通りである。

わが国への伝来は法澄派の開祖覚心が、建長のはじめ入宋して、宝祐元年（一二五三）護国寺に提唱中であつた慧開に参究し、翌二年帰朝に及び、彼より本書および月林録を携へて、帰朝したのに始まるといふ。正和四年（一二三五）覚心の開創した紀州興国寺にこれを開校し、爾來復刻され、さらに応永十二年（一四〇五）武蔵国広園寺において重刻されたといはれるが、それらの諸本は殆ど見ることが得ず、今日の流布本は、江戸期に入つたものが多く、特に寛永九年、延宝八年、宝暦三年の刊本、または鈔本は、比較的容易に見るを得、註釈書としては、西柏鈔、籠頭無門関（弥衍宗紹）、改定評唱冠注無門関（谷空）、無門関

講義（宗演）、弁注一卷（著者未詳）等があり、今また無門関の研究（金子白夢）、無門関解釈（紀平正美）、無門関の新研究（井上秀天）等は有名である。

## 2

さて、ここに国語資料としてとりあげる架蔵本無門関抄五逆秋は、縦二十四センチ三ミリ・横二十センチ、袋綴り、墨付百五丁よりなる冊子であって、表紙に五逆秋と表記されている。

その奥書は第百五丁裏に次のやうに見える。

千時慶長十五年庚戌七月五日関牛首座聞書之

千時貞享三年六月廿九日 清光山極楽寺七葉 沙門梵誓書了

五逆秋の名称については見返しに当たる一葉（第一丁表の右頁）に、落書き風に

五逆秋 会下也僧コロンチヤ程ニ五逆ヨ

秋トハ月有花有 何ヤラカ（ヤ）ラ有ルゲナ

清光山果還院極楽寺

とあることで、この鈔本の別名として特に貞享三年梵誓書写の後につけられたものであるらしく、その名の由来も一往明らかになされてゐる。

さてその冒頭（第一丁表）は次の様にはじまる。

禪宗無門関 関牛比丘聞書之

右ノ録田応和尚一夏談話ノ時語ニ一衆ニ云、此録我自沙汰スルニ非（ズ）。古ノ名人衆ノ諸註ヲ集ル中ニ一徳一失ス。又山僧ハ昔ノ伝モ非レ為レ正ト。捨レ彼取レ此拾レ此取レ彼其ノ善キ者ヲ選テ此伝ニ合ノ沙汰スト謂ヘラク而已。予信レ之聞書即披露ス。神妙也ト云テ且ツ相加ニ添削曰只恐ラクハ君カ窓前ニ

拙テ老僧カ恥辱ヲ外ニ不可揚。埋テ席下ニ愚カ無カラン時容レ声可レ思云々

（二三）の句読点送り仮名は筆者補入）

とあり、円応和尚の一夏の法話を関牛比丘が慶長十五年（一六一〇）七月五日に聞き書きしたものを、清光山果還院極楽寺七代の持僧梵誓が貞享三年（一六八〇）六月廿九日に書写し終ったといふことになる。円応は「日本洞上連燈録」に「正堂字円応。肥後法泉寺三芳、宗仙の法席を嗣ぎ、某年寂」とあって、寿が明らかでない。因みに法泉寺は肥後託摩にありし曹洞宗の名刹である。

また清光山極楽寺七葉の沙門梵誓については、誰であるか未詳である。極楽寺については相州鎌倉の名刹があるが、肥後では筑後島の浄土宗極楽寺を知るのみでこれも未詳である。恐らく本鈔は九州肥後の地に伝はった無門関の古鈔本であらうけれども、その由来については明らかでない。

なほ、本鈔はその序文の内容からもわかるように諸抄の結集であるが、その主原拠を関東系の鈔においてゐるものやうで、そのやうな諸相を言語の上にも探ることができる。

一、地名に関東のものが多く見られる。

窮心トハ利根川ノ水上ヲ窮メテアレハ律ノ雫秋ノ下露叻

（ダゾ）其ノ薙ヲ終却ノ見ヨ利根川ノ路ハ終ヘヨウゾ（ハウ）

吾レハ赤嶺ノ利根者チヤト思タレハヲ主ハ嶺赤ノ利根者チヤト

称タグ：（一三才）薙ノ字ナドヲ利根ヤケテ林四郎ト書立タツ

レテ五経ノ註撰無用テ走程ニ：（二〇ウ）

二、ベイ（意志）、ダ（指定）の助動詞が早く見られる。但しダは肥後ではかなり頻用される傾向が、今日の口語で指摘されるが、この鈔本のは関東系であらう。

天地ヲ手裏ニ握ルベイト也(九ウ)

者竹ノ連テ親ヲ見ルヘハ一回シテ始テ得ベイト也(一八ウ)

口持ヲ云フベイト云フテ叶ハヌ浮世僧共ガ(七三ウ)

首山ノ騎馬ハ驪<sup>ウラ</sup>デアンベイ(九四オ)

夕については本論に委ね、ここでは説かない。

三、動詞の一段化の傾向が顕著である。これは本論においてとりあげべき一問題であるが、今は二三の用例を引用するにとどめる。

付ケル(一ウ)シレルゾ(四オ)スリツケレバ(四ウ)ヲト

ツレル(五一オ)ヨケル(七一ウ)サケル(九八オ)

四、イ・エ(ヘ・ヱ)の混同がみられる。

トラマイテ(三五オ)アマイカカル(三九オ)チガイ<sup>ウ</sup>(四ウ)

五、強めの接頭辞(オツ・ヒツ・ウツ・ツツ・フン等)が採用される。

オツ取ノケテ(四オ)ヒツツカネテ(一二ウ)ウツ付テモ

(二オ)ヨツ、メテ問ヲ(一四ウ)ツ、立テ有ルヲ(一〇一ウ)

フンゾツテ(五三ウ)

等があげられる。その他ハ行四段連用形の促音化の傾向、形容詞の連用形(シク)の多用、あるいは本論と関係ある指定辞の比較的早く多用されてゐることなどが付加されるであらう。

3

以上の如き、関東的色彩の著しくあらはれてゐる言語の鈔本が、何故に肥後に行はれたかといふことは、この鈔を論ずる場合、根本問題となるが、これはなほ研究を深めつつ考察すること

にする。

上述のことは、この鈔本の国語資料としての価値を論ずる場合に、別種の諸問題を提供することになるものである。まづ聞き書きと書写の年代に関することがある。いふまでもなく、慶長十五年と貞享三年の間には、年代的に七数十年のひらきがあり、しかもそれは古代語より、近代語への過渡期として、極めて重要な時間的推移である。つまり、原聞き書きを書写する場合に、その間に於ける言語変遷の事象が、書写本において、既に原聞き書き本との異なりを生じさせてゐたのではないかといふ疑ひを挿む余地は十分にあると思ふ。然し考へ方によつては、たとひそのやうな混乱した事実が、本文の中に実在したにせよ、それこそ通時的には過渡期における様相を示すものであるといふ観点にもたれ得るし、またある場合には、その様な混雑した現象のなから、上限と下限における言語事実について取捨採択もできようといふものであらう。ともかく右の様な点に関しては、後述のごとく、四つがなの混乱状態、指定辞の出現の時機、開長音(アウ)と合長音(オウ)の表記上の混乱、あるいは活用語尾における音便現象の固定化等は興味ある現象として、とりあつかひするものであると思ふ。

然し、右に述べたが如き通時的観点よりする資料価値の問題よりも更に重要なのは、既述のごとき、関東系言語の中に、あるいは西日本系の言語、特に肥後におけるそれが混在してゐないかといふことである。つまり前の時間的關係に対して空間的關係においての言語の混乱である。むしろこの方が、資料的価値としては致命的な諸条件を供与する可能性もあるであらう。例へば

(1) 八行四段活用の連用形の促音化の傾向と、一方ではウ音使化の傾向との混在。〔ウラナツテ(五七ウ)、見ソコナウテ(五五オ)〕

(2) 形容詞連用形のク・シク語尾とウ・シウ語尾の混在。〔ヲボシクテ(六ウ)ワルウテ(七オ)〕

(3) 一段活用と二段活用の混在〔シイルヤ(四八オ)静ムレバ(七二オ)〕

(4) 既述の如く指定辞(または形容動詞の活用語尾)ダとヂヤの混用が多く、しかもダは比較的早い用例として認められる。但し、これは現在の熊本方言においてもダの優勢なることが指摘されてゐるから、あるいはそのやうな古例の顕現として認められないこともない。

(5) まれに接続助詞サカヒ(ニ)がみられる。〔焔ヲ挙ルサカイニ泉(三九ウ)〕

以上のごとき東西言語の混交現象が、一往問題となるであらうが、これも見方を換へれば、一つの過渡期的言語事実として、ある程度、通時論的処理に委ねることも可能であらう。現に以上の諸問題は、前述の通時論的事象と重複する部分を多分に備へてゐるからである。ともあれ、本鈔を国語資料として眺めた場合の問題点は、複雑なものがあるが、その個々の事象については、その都度考慮を払ふことにし、全般的には、なほ通時論的立場を主とし、近世初頭における言語の過渡的現象として観察してゆかうと思ふのである。

注(一) 参考までに本鈔におけるこの部分の解を抽出する。

頰ニ大〇門武蔵野ニ入ニ昔モ今モ門立タ人ハナイ千〇路  
八方ニフミアケテカケサワリハナイ又武蔵野ニスマイスル

入道カ歌ニ へ武蔵野ニヨルベイ花ハエアラレド露ユツボ

(ケ)レバヲラレザリケリ向フ詠ダヨリ見レハ天神人丸ノ  
詠シテハ足ガカリガ有ルゾ。透〇関ヤレ八方へ透過セヨ

乾〇歩彼入道ガ一足ニ立テ花ヲル足モトヲ古人カ乾坤大地  
足解脫ノ門ト云又ハ乾坤大地無第二人ヨリ透過シテ見ヨフ  
タツトアルマイゾ。(四オ・ウ)

〇は原文(主として一〇ウまで)に文字の省略として用ゐられたもの。( )内の傍記は筆者補入。因みにこの内容からも関東奥の強いものであることがわかる。

(2) 梵誓は浄土宗宗見寺の開祖観靈(寛文元年卒)、大雲寺開山貞存(寛永五年)が仏家人名辞典に掲げられてゐるが年代が合はない。

(3) この期におけるダの用例は案外に少ない。この資料はこの欠を補ふ価値が十分にあると思ふ。

口語法別記(二九四頁) 西翁十百韻雑兵物語の例を挙げ  
る。東国地方に用ひられた。室町時代には恐らく東國の一般の国語になつてゐたと思はれる。近世前期の上方の作物にも折々現はれるが、常に東国人の口から之を語らせてある。(湯沢幸吉郎国語史概説一二四頁) 小林好日日本文法史二一五頁参照

(4) 口語法別記二八九頁等参照

## 二

ナリ いふまでもなく古語そのままの指定辞であり、本鈔における最も一般的なものである。ゾよりも用例が多いので、その様な観点よりすれば、ナリ系の抄物といふべきであらう。終止形はし

ばし「也」字と混用である。ただ連用形・命令形は用例がな  
い。

打成一片ナラバ尺迦モ達麻モユルセ〜デ有ウゾ(一〇オ)

先ツ阿ハ高遠ノ徳有ルニ付ケル字ナリ爰デハ惠開ノ事也(二ウ)

無道悪王ニ非ズ聖王ナル故聖節ト云(二ウ)人々ノ上人ナレバ

門像ハイラスゾ(三オ)

のごとく未然・終止・連体・已然の四形に見られ、いづれも体  
言承接である。未然形にはニアラズの如き未融合形が見られるこ  
と勿論である。但しとき

南陽忠国師ノ下テ生下未分ノ話ヲ得心シテヨリ以来此ノ上樹ノ

話ヲ建立スル也。(一九ウ)ナゼニナレバ人ノ上ニ居ル程ニ

(二ウ)一道ニ流ルヲハ一河トヤ云ン二河トヤ云ント也(八

オ)

の如く、活用言の連体形、または助詞ニ・トを承接したのも見  
られることは注釈文の常として別に珍しくない。勿論形容動詞の  
語尾ナリも

君徳明ナル事日月ニ齊シキ也(二ウ)

若身心俱了タナラバソレコソ真実ノ神仙ヨ(二九オ)

の如くやゝ量は少ないが見られる。

ナリに対してタリは極めて用例が少なく

屠沽下類ニノ重罪ノ者タリ(五ウ)

古ノ代句ニ心タル伝底亦何事ゾ(五六オ)

訓読文に終止、連体両形が見られるだけである。

ナはナリの語尾を失って短化したものであることはいふま  
でもない。用法は終止・連体両形にとどまる。連体接続形が語尾

を失って、終止形にまで及んだとみられる。このナには形容動詞  
の連体語尾と見られる例があって、

此猫児ノ膚ナ人有テ此主人公を説破シタ郎ニハ(三九ウ)

老狗ナドガ無用ナ鶴ノ無遊カナ(一三ウ)

などはその傾向が強いが、体言を承接した例として、

遠客久シク御来臨ナ程ニ且ク坐ソ御咄シ走(二二ウ)文殊ノ陸

座ニ成タ山ナ程ニ(六四オ)何モ坐禪ヲ励ス手段ナ程ニ(八二

オ)主ト云者ハ上ヘ居スルモノナ程ニ(一〇〇オ)ソウトモハ

ツレ又ハ知意ナ故タ(七六オ)

の如く接続に関する形式体言(あるいは接続詞)の「程ニ・故

ニ」等と熟合する傾向が極めて強く、その点では形容動詞語尾の

ナとの区別が比較的明瞭である。勿論

無一物ナ程ニ今狐貧ト名乗テ出叟(二九ウ)

のごとき「形容動詞語尾ナ+程ニ」の用例もないわけではない  
が、極めて稀である。このことから、指定の助動詞連体形ナは接  
続する体言との熟語的結合において形成されていったものであつ  
て、形容動詞語尾ナは接続体言との結合が比較的自由であつたと  
いひ得るのである。従つてこの副次的現象として次の様なことも  
看取できるのである。

1. 指定辞ナリの連体形ナルは訓読調の所に多く見え、ナに比し  
て用例が局限されるが、その用法はナにおける傾向と一致して  
ゐる。例へば

無道悪王ニ非ズ聖王ナル故聖節ト云(二ウ)

は熟語的指定辞ナルであり、

君徳明ナル事日月に齊シキ也(二ウ)唱声虚ナルヲ聞テ即許ス

(六ウ)

のごとく形容動詞語尾のナルは接続が自由である。

2. ナは今日の口語の形容動詞連体形に見られるやうに發達すべき素地を持ってゐたわけであつて、むしろ上位語との結合に熟語的傾向が強くあらはれる。

是程ナ谷話ハ伝灯一千百人ノ善知識ノ中ニモ有マイゾ(一八オ) 不<sub>レ</sub>上虎頭上座ノヤウナ人ガ樹下ニ有テ(一九ウ↓二〇オ) 塩<sub>レ</sub>噲ノ隠水毒水グナ物ハ無イ時分ニ(二七ウ)

大名ニ成タ用ナ事タ程ニ(二九ウ)

知者底ノ中デイラヌ事有リ走ナ問答田ゾ(三〇オ)

町ナドニ出テ買タイ物ヲ呼ブ如クナ程ニ……(三一ウ↓三二オ)

の如く、ヤウナ・サウナ・ホドナ・ゲナ・ゴトクナ等の情態表現の熟語(形容動詞の一種)を形成している。

3. この様な形容動詞または情態指定の熟語語尾ナが、まづ終止形に転用されはじめてゐることも顯著な特色といはねばならぬ。その例

大名ニ成タ用ナ事タ程ニ身心俱ニ了タナ(二九ウ)

ノウノヨ主ハ見カケハケツコウナ(七五ウ) 判木ヲ起シタ事ト云テ吉ソウナ(二ウ)

秋トハ月有花有何ヤラカ(ヤ)ヲ有ルゲナ(表紙ウ)

扱コソ式部ハ花ノ本ニモナヨリ走ナ(二九ウ)

これが更に終助詞的に用法を拡張させると

自己目前了タナハ聞ヘタナ(六五オ) 互ニ余念有ルマイ底タナ

(二二ウ)

のごとくになったものが稀に存する。

さて以上観察したことによつて、指定辞の語形が変遷する推進力は、依然とし連体形であり、終止形がそれに準ずる方向に進むのは、近世の国語変遷の一特色を示すものであることがわかる。然してナリの指定の助動詞と形容動詞の語尾とに分岐するポイントもやはりナル<sub>2</sub>ナへの現象において顯著であつたわけである。もともとナルは上古では存在表現として發達し、指定の意味に用ゐられることは消極的であつたから、むしろ形容動詞連体語尾として多くその地位を確保してきたわけであらう。それがナに変化する期に臨んでいよいよ語性を明らかにして、もっぱら形容動詞活用語尾の方向に進むことになり、指定の助動詞の用法が衰退してしまつたものと考へられる。

注(1) 湯沢幸吉郎室町時代の言語研究 一九二頁

(2) ロドリゲスは大文典の中で *ro* は文を終止させることができ、*narū* は文を終ることなく、(恐らく連体の意であらう。) 大体はなしことばとかきことばの上に区別されることを述べた後、「その複合語は「よみ」との間につくられるのでなく「こゑ」との間にもつくられる」と述べ *Quidocuna. 1. narū nanguina. 1. narū Gučina.*

*1. narū* 等形容動詞の例を挙げてゐるのは、形容動詞連体形の造語力の強いことを意味するのであらう。

土井忠生訳 ロドリゲス日本大文典(二五一→二五二頁)

デアル(デナイ)いふまでもなくニテの融合デの發生により、ナリの未融合形ニアリの交替形である。デアルはアルの殆どすべての活用形を整へてゐることは、周知の所であるが、本鈔では、終止連体両形は更に形態の進んだヂヤ・タに交替を完了してゐて、あらはれない。

只己が心内デ明メタ如デアラウゾ(九ウ)ユルセ〜デ有ウゾ(一〇オ)頭々物々我デアラウヨ程ニ耳ガ眼タガ耳デ有ウ(四六オ)今ガ始デアロウ(五九オ)(以上未然形相当)

泉式部ハ仏ニハ不成ナラシ眺ノ鏡ト云字ガクライデ有ツタト申ス(二九ウ)徳山ハ本教者デ有ツタガ(三五ウ)(以上連用形)

ナリの連用形が本鈔ではみられないことを既に述べておいたが、それに交替した形である。

但し、連用中止法としてツラウ(ツロウ)に接続した形は係助詞の介入する傾向が強い。

叶ハヌ愚入道共デコソ有ツツロウ(二三ウ)

粥前デコソ有ツ郎(二四ウ)僧モ喫粥以後デコソ有ツ郎ハヤ被下タト也(二四ウ)孤峯頂上ハアノ深山ノ事デモアリ、又孤峯頂上ニスワツタ事デモ有リ(六七ウ)

特にコソヤモの場合が目立つ。

既述のごとく、終止連体両形の確例がないが、マイに接続した形においてそれもデハアル形で僅かに見られる。

兩ナリトモ降テ有ニハ秋デハ有マイ(七三オ)アマリの悪事デハ有ルマイカ(三九オ)

またベイに連なる場合は撥ねて

首山ノ劈面ハ驪デアンベイ(九四オ)

の如くなる。

此ノ大平方横堅ヲ兼ヌデ有レバドコへ過ギ去ラウニ……(八四ウ)向機間ニ一路ノ開ケタモケツコウナ事デハ有レ氏(一〇三ウ)

已然形デアレは、用例が比較的少なく、多くは係助詞を介入させて

チャクト聞テ得タデコソアレ、実地ニ此レガ為ニ説イタデハ無イゾ(七〇ウ)他后ニ疑ハレマジキ為デコソアレ(五九オ)の如きコソアレの係結形を示すものが多い。

命令形は用例が少ないが

此境界ナ人ニ仏ヲ問フ程ニ何デモアレ持合セヌ(四八ウ)の如き用例があり、その変態としての融合形デマリがある。

御酒サカナ台ナドト云テナンデマリモタヌ程ニ(四九オ)

因みに中間形のデマレは本鈔には見えない。

デアルの否定形はデナイである。デアラヌを用ゐずに、アル・ナイを対立させる傾向は本鈔では著しく強い。終止・連体・已然の用法があり、未然・連用は形容詞補助活用形をとる。

南泉ノ脱躰底ガ人ノ為デ無イト代タゾ(七一オ)(終止)

一筆横付テモ消ベキ本デ無イ程ニ(二オ)其儘ニラチ付ケヨウ人デ無イ程ニ話墮也(八六ウ)(以上連体)

等はデナイの形であるが、多くは係助詞を介入させて、

其ノカミノ乱劇少々ノ事デハ無カツタ(九二ウ)(連用)

常ノ達麻ノ事デハ無イ(一七ウ)御主ノ法度ニカカル月デハ無

イト答ル処デ：(一一ウ)角ヲ立テ見ヨウ事デモ無イ。(五六ウ)(以上終止)

又角ヲ立テ聞ツ事デモ無イゾ(五六ウ)人毎ニ私ナドヲモツタハ秘藏ナ物デハ無イカ(七一オ)(以上連体)

富士山ニ比シヨウ事デハ無ケレト(七九オ)(已然)等であつて特に終止形はそのような例が多出する。

チャ チャはいふまでもなく、デアルの縮約形であつて、語尾を失つたデアの融合したものであるが、既述のナと同じく、終止連体の用法に止まる。

ナゼニナレバ夢ニハ言慮ノ及ブ事ヲ見ル物チャ(一九オ)底無イ淀川チャト思召シ(三一ウ)

此話ノ所詮ハ墮落一致ガ肝要チャ(一三オ)

最後の例は形容動詞の語尾であるが、いづれも終止形である。

王ニ父母無シト云テ 父母ノ沙汰ヲスルハ殊ノ外物知ラズチャ(二ウ)

活用言の連用形(名詞形)を承接した形である。

童子が日比或ハ道チャ無チャ有チャノ毒水ヲ(一六オ)是チャ非チャ触チャ背チャトサマノニ法灯前デ勸弁シ助(三七オ)

いづれも併列である。この様な場合にはチャハの形をとることが多いといはれているが、本鈔にはその様な例はない。

身連ノ腹ハ仏法ニ味チャガ(四三オ) 世界恁麼ニ広闊チャニ鐘声ニ驚テ(四四ウ) 出ルモ入モ月日ヒトリチャゾ(九二ウ)

香水海スル人チャ物ヲ拾<sup>レ</sup>足ヲ云ガイヤダ(五四オ)

形容動詞語尾と見られるものもあるが、これらは連体形と見るべきであらう。なほ、

乾竹ヲ炎天ニサラシタ如クチャ程ニ(一ウ) 心口有ル者チャ程ニ聴ニ聞ノ之(五ウ・一五オ)

の如きチャ程ニの用例は多い。「程ニ」を独立の接続詞と見ればチャは終止形とも見られるが、連体形としておく。接続詞として熟語化しない以前の形である。

范丹ハトツトノ貧孤チャ有ルガ(三一オ)

は一見連用形と見られるが、恐らく「デハ有ル」に相当するものと考へられる。

ダ ダはチャの更に短化したものであり、チャよりも新しい形であることはいふまでもない。然し本鈔におけるダは比較的早い部類の一つであらう。既述の如く、これが関東方言の特色としてあるか、あるいはこんにも熊本方言の溯源的な現象であるか遽かに判別し難いが、恐らく前者に属する現象であらう。ともあれ、当時におけるダの資料としてはかなり用例が豊富である点が貴重であると思ふ。チャと共存して、終止連体の用法に発達してゐること勿論である。

終ヒニ此序ヲ書キヌト序シタハ手柄ナ序ダ(二オ) 会下僧ノ茶飲ミ所ダ(七三ウ) カラ船ニスルガ肝要ダ(八オ) 国師ノ珍物モイヤダ(四八オ)

ダとチャの用例は終止(断止)形では、その数も相伯仲して、殆ど区別を感じないが、

口ガ無イ人ダ程ニ(一七ウ) 老ノトキトテ是計ダ程ニ(二四オ) 此ノ人ノ脚下ニ有ル四禪天ダ程ニ(五四オ) 有<sup>レ</sup>家ノ夏ダ程ニ(一〇オ)

連体形が「程ニ」に接続する形はチャ程ニに比べると右の数例だ

けであるから、用例が非常に少ない。これに反して

ホト〜ト打瓦子町(三ウ)紫門ノ造リヤウハ足ガ至極脚此松  
樹ナレドモ住持ダゾ(一一オ)老ノ尉トテハ鏡斗町(九〇ウ)  
ダゾは町なる造字に見られやように、ヂヤゾに比して非常によく  
発達してゐることがわかる。この事象はヂヤとダの連体形におけ  
る顕著な傾向として指摘されるであらう。いづれにせよ、ヂヤ・  
ダはデアルより進化したものであるが、その推進の原動力は終止  
連体形にあつたといふことは明白である。

注(1)湯沢博士によればニテモアレVデモアレVデマレVデ  
マリの三転を説かれる。(室町時代の言語研究二八五頁)

(2)湯沢幸吉郎 国語史概説一二三頁

時忠ぢやは知盛ぢやはなどいふ一門の衆(天草本平家二〇二  
頁)頼政ぢやは光基などと申す源氏ども(同一六頁)印号ハ  
号チヤハ印チヤヲ受用イタソ(蒙抄一〇・四六オ)

(3)太子ニハナントシテ跡ハセソチャホトニ……其師伝ヲ跡  
シタソ(史記三、五二オ)(室町時代の言語の研究二五二頁)

#### 四

デソウ 丁寧表現であつて、デにサフラフ(ソウロウ)の接続  
した形が短化したものであることは説かれてゐる通りである。因  
みにサフラフは

道光イタダイテスツキト吞テ後昨晩下炬ノ一句ヲ御示ゆへト乞  
タレハ(五ウ)

我レ衆ノ数ニ入りゆへドモ加給ノ事ハ承ラヌ(五九ウ)

のごとく、極めて稀れに、それも已然・命令両形にあらはれ、他  
は多く「走」字をもつて、サウ(ソウ)にあて、終止・連体が主  
となる。

説破ニ云東山和尚へ申走(九六ウ)菟角ニ舌頭デ云テハキコヘ  
ソウマイ(五三オ)云ハレヌ事ハ云ハヌガヨウ走。作者モ夢モ  
ウソゲナル事ハ語ラヌガヨウ走フ(六三ウ)月流レテ走フ(一  
三ウ)以上終止

徳山ハ咳氣眼病重テ目鼻ガ落テ御座足ヨ(六九)、演禪師へ申  
走虚空ニ向テハ虚空ガ点頭申シ走ヨ(八三オ)

等は一般助動詞としての用法であるが、特に注意すべきは

六道四生ニ乗リコンデモヨワゲハ走ワヌ(四七ウ)

の如き、未然形「ソウワ」があることであつて、従来、未然形も  
同一語尾「ソウ」として挙げられてゐたもの<sup>2)</sup>に對する新形として  
極めて珍しいものであらう。従つて「デ走」の場合も

扱拙ハ不曲不直デ走ヌ(九九ウ)

は恐らく「デソウワヌ」(デサフハヌ)と読むべきものであら  
う。

不昧万錯イヤ〜バクチ双六家々ノ法度デ走(一一四オウ)何ヲ  
云イ来ルニモ左デモ無イ〜トドツチニモ傾ケヌ時白一色デ走  
(一一五ウ)作者ハ鈍ナ程ニ老ボル、者デ走(一一六ウ)(終止)  
イクツ有テモ遊山デ走程ニ(一〇オ)貧ナ者程乞トモタマラヌ  
物デ走程ニ……(三一オ)明<sup>カ</sup>此事<sup>ヲ</sup>諸宗共ニ大事デ走ヨ(二六  
ウ)(連体)

のごとくである。連体形は終止形に比し用例が少ない。勿論  
イカソウトモコロソウトモ儻デ走(二〇ウ)一段殊勝デ走ト也

(三二一オ)

の如き形容動詞に準ずると見られる例もあり、稀れに、活用言の連体形を承接した。

岩頭ノツラ替リシヲ見テハヤ用ガ無イデ走フ程ニ(三七オ)

のごとき例もみられる。

デソウに比してニソウは極めて劣勢であって、僅かに

是ハ一段殊勝ニ走(七〇ウ) 無門ノ御即今一段殊勝ニ走(七一

オ)

の二つに固集、定着して、しかも「殊勝走」の「捨てがな」として挿入的に小記されてゐることを見ると特殊な用法であつたことが推察される。

デゴサアル(デゴザナイ)

抄物では多く未融合形ででてくるが、本鈔は「御座有」の字面である。アルの丁寧表現ゴサアルが接続助詞デに接続して熟合し指定辞となつたことも言を要しない。否定形デゴザナイは、デアルに対するデナイの対立と同然である。用例は比較的少なくすべて終止連体両形である。

至聖歴祖ヲモ吒クワツト哮出シテ御座有ル(二オ)

のごときは「御座有ル」の単独の用法で「有ル」の意が強いが、

天竺大唐日本ト化廻ル物ヲ見テアレバ七色ノ狐デ御座有ル(八

二オウ) 終止

南泉和尚ハ東岸居士デ御座有ルカ(五二ウ) 香山和尚ノ会下ハ

八嶋檀ノ浦デバシ御座有カ(二一オ) 連体

は、デゴサアルの指定である。最後の例は、係助詞バシの挿入された形である。

ゴサアルの未然形に一つ

又ハ火ニ入テハ何ト御座有ロウ(九四オ)

があつて、トゴザルで一つの指定辞を構成している。ゴザナイは

柳ハ緑花ハ紅イ好時節デハ御座無イカ(五二ウ)

の一例それも係助詞ハが入つた形として見られるのである。これらの敬態指定については、他の常態指定との間に、別に位相・場面<sup>の</sup>相違を認めるものでなく、適宜に混用したと解してよいのであらう。(未完)

——一九六二・三・二〇——

注(一)「走」字は他に様態をあらはす形式体言サウに用いられる、その例

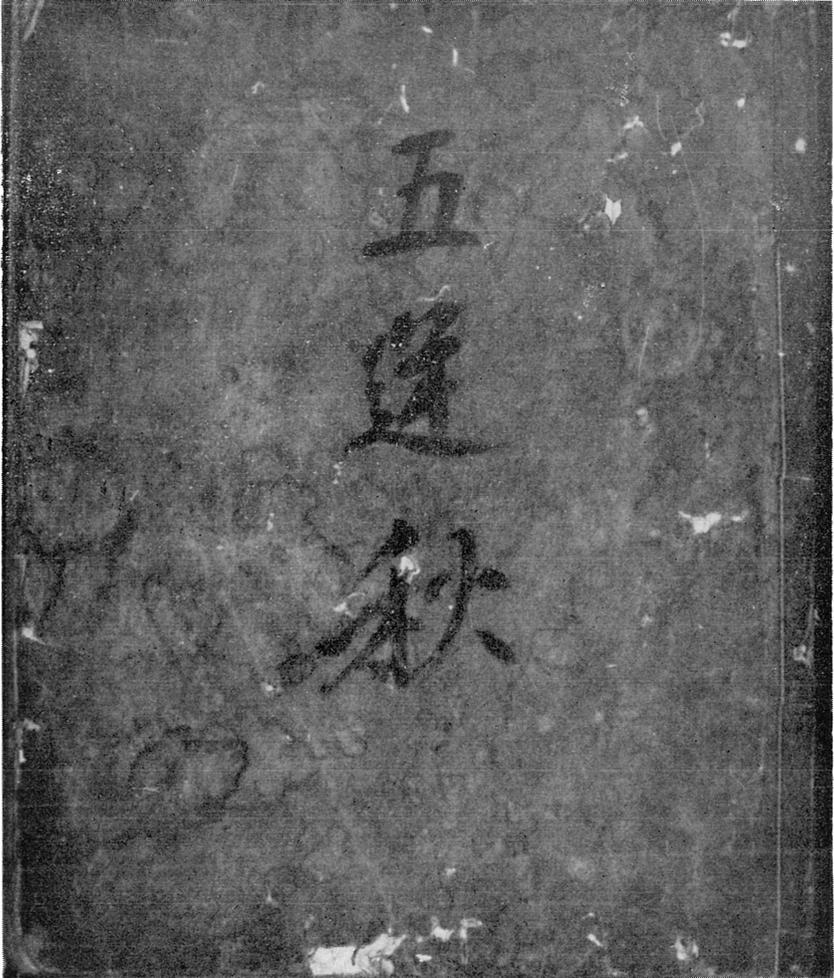
虎ゴゼトト召セトモ虎ハ出夕程ニ喧花カ出来走ナ作者ハ

……(四八ウ)

(2) 湯沢幸吉郎室町時代の言語研究(一六八頁)→一六九

頁)

後記 小論引用例文の句読点、濁点のごときは原文はなはだしく粗漫である為、改めて補足したものが多し。



(表紙)

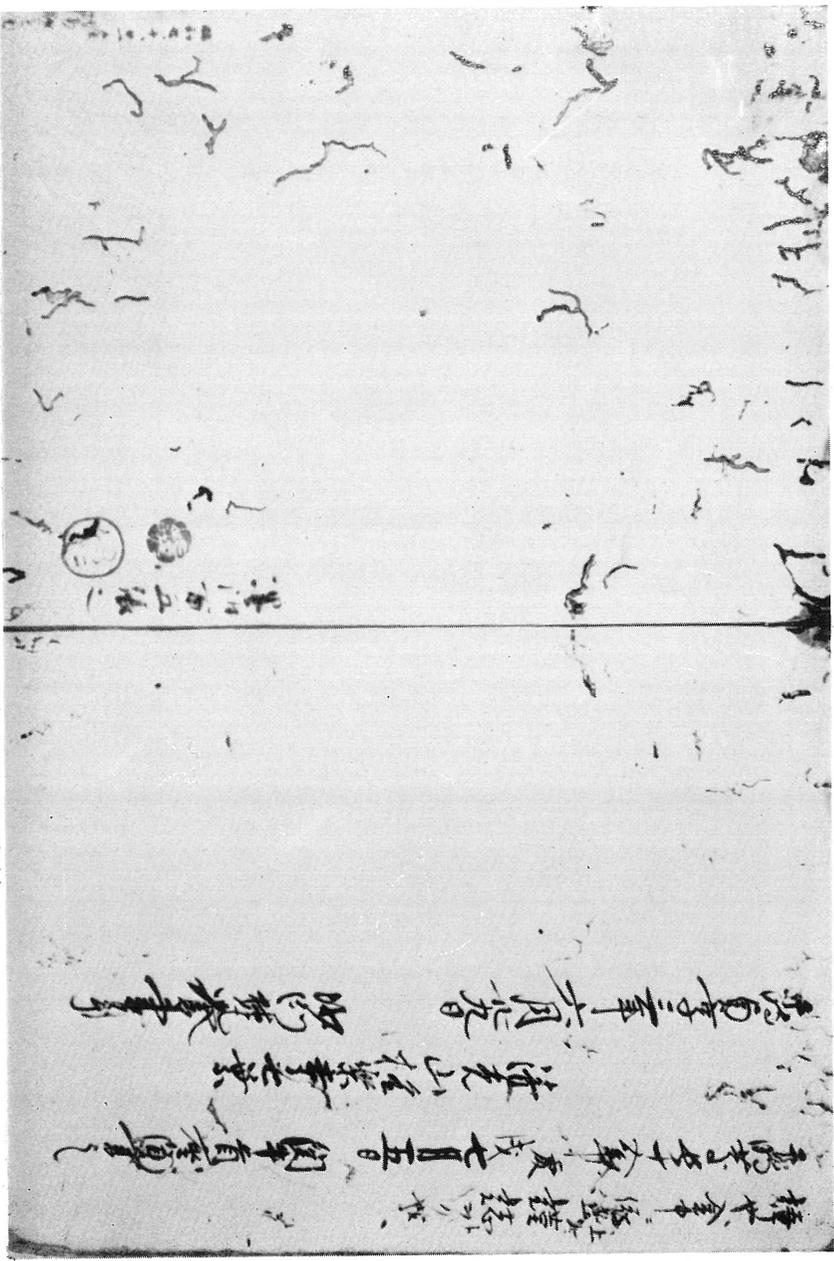
韓宗室門閥  
 右蘇園意和高一隻校器將梧一卑子什派亦自  
 以修建石各人中銘註集一怡一失又山僧者  
 傳水馬正捨取取火拾取取取取取取取此傳命  
 以修撰子已千信之閣書印取取神妙也云且相  
 加修則可只居君象前梳老僧耻辱外不可揚顯  
 端席下懸空時容事可累  
 既通無門盡大代八得人代云八字字八字折  
 聖之極云字八每上者百其事八八字信處有情是  
 畢直振條情上青素自長想不圖皇象卷一

(第一丁表)

五定林  
 齊之僧口三平程  
 秋一月自家有  
 學子不有八十  
 清老山泉意長松字

(表紙裏)





(第百五丁裏 輿書)